

## 序文：「古代湖」の特集号によせて

河合 崇欣

(名古屋大学環境学研究科地球環境科学専攻)

「古代湖」という言葉から、人はどの位の昔を思い浮かべるのだろうか。今回、はからずも「古代湖」特集号の編集に携わることになって、それまでは何気なしに聞き、何気なしに使っていたこの言葉を使うことに改めて不安を覚えた。

湖を時間でグループ分けすることで何か科学の議論を進める上での積極的な意味があるのだろうか。「中代湖」や「新代湖」を対照グループとして考え、全湖沼を統一的議論にのせられるのだろうか。どのような要素を時間に重ねれば「古代湖」をグループ化することが意味を持つのだろうか。そもそも、どこからどこまでを「古代湖」のグループに入れれば良いのか。

「時間」との関連性が強い現象はいろいろあるが、比較的閉鎖性の強い生態系を考えやすい「湖」と言うことで唯一頭に浮かんだのは、「生物の進化」である。それぞれの湖に固有の種が生まれるのにはそれなりに長い時間が必要である。時間と共に固有種の比率は増え、例えば3千万年の歴史を有すると言われるバイカル湖では、これまでに記載された生物の3分の2位が固有種であると言われる。しかし、これとでもバクテリアと魚とは掛かる時間が全く違うだろうし、湖がある場所の気候やその他の環境によっても違いそうである。それぞれの湖の生態系を単純に時間の関数として特徴を比較し、議論できるような情報の蓄積が十分あるとは思えないし、近々、それを充実させる条件が整っているとも思えない。

本特集号を読んでいただければ、すぐにおわかりになると思うが、本編は「古代湖」と言う言葉を軸にして何かを統一的に概観するという形にはなっていない。それぞれの執筆者に、取り組んでいる研究内容を通して「自分の古代湖」を思い思いに書いて頂くことにせざるを得なかったからである。読者諸兄姉の慧眼が何かを読みとって下されば幸いである。